

# 意味分析の対象拡大により見えてくるもの：

言語分析から人文社会科学へ

児玉徳美

## 1 はじめに：意味の領域

意味分析とはいえ、意味そのものがあいまいである。「意味の意味」という本（例えばOgden and Richards 1923）もあるが、それによって意味が明確になっているわけでもない。意味と形式（音声）の結合した言語そのものも多様な意味に用いられる。そのことは言語活動における意味が多様な領域と関連していることの証拠である。20世紀の意味分析や言語分析は、「科学的」であるため一方では自然科学や形式主義の影響を受け「理想化」の名のもとで抽象化・形式化を進め、他方では皮肉なことに以前より対象領域を狭く限定し多様な領域の意味を排除してきた。そこで本稿の目的は、意味分析の対象領域として本来どのようなものが想定されるのか、従来の意味分析の壁を破り対象を拡大するためにはどのような方策があるのか、最後に意味分析の対象を拡大することにより言語を中心とする人文社会現象のうち何を明らかにすることができるのかを考察する。本稿の関心は言語理論と言語論や文化論、さらには人文社会科学全体をつなぐ分析対象や方法論にあり、用例の多くは筆者がこれまであちこちの論考で扱ったものを利用する。

人間の「思い」のうち言語化されたもの、または言語化されたものから示唆されるものが意味であるとするなら、意味と形式が結合して言語になる。意味と形式の一方が欠けたものは感覚か騒音であり、言語と呼ばれない。言語について語ることは意味について語ることでもある。言語の関与する領域として次のようなものが想定される（以下、言語分析・意味分析の対象領域の考察（1）（2）は児玉2004を要約したものである）。

- (1) a. 意味と形式
- b. 概念と意味
- c. 空間・運動の知覚とそれら他領域（非物理的領域）への写像転用
- d. 言語表現と世界
- e. 言語と思考・文化

(1 a) は従来言語学が対象にした中心的な領域であるが、意味にしても形式にしても言語知識 (competence) のレベルか言語運用 (performance) のレベルかで違いがみられる。(1 b) の概念は言語化される前の「思い」である。(1 c) は認知能力と言語能力が相互に関連し、(1 d,e) は言語と現実世界・社会・慣行などが関連する領域である。意味分析や言語分析は(1 a-e) の間に存在する対応関係を明らかにすること、つまりマッピングを目的にしている。マッピングは(1 a-e) の各領域内のものに限らない。対をなす各要素が意味を有しており、異なる領域間のマッピングも課題となる。

(1 a) のような多様な領域と関与しながら発せられる発話には次のような意味が埋め込まれている。

( 2 ) a. 言語知識としての語・句・節・文などにより指示されるもの

b. 発話の場面が提供する情報

i) 直示表現 ( deictic expression ) や臨場などにより発話の指示対象を特定する場面情報：対話者が誰か、場所・時間・事物の特定化など

ii) 発話に直接・間接的に影響を与える場面情報：対話者の人間関係、場面の雰囲気 ( 堅苦しさ・なごやかさなど )、場面での出来事など

c. 話し手の意図・主張

d. 話し手の世界についての知識・価値観

( 2 a ) は言語の生成理解を直接導く意味であり、( 2 b-d ) は文脈情報とも呼ばれる意味である。( 2 a ) の言語知識 ( またはラング ) としての意味は発話では ( 2 b-d ) の文脈情報により多様に増幅したり、逆に特定化したりする。増幅や特定化の変化を受けた意味が言語運用 ( またはパロール ) の意味である。つまり言語知識は文脈情報という因子により変化する言語運用の適用範囲を示す指標であり、言語知識と言語運用は本来対立するものではない。

ところで、意味の関与する ( 1 ) ( 2 ) が意味分析においてこれまでどのように扱われてきたのかということが問われる。意味論は統語論の強い影響を受け、言語知識としての文内の意味構造を扱ってきた。文脈情報も考慮し、文を超える発話を対象にする語用論や言語分析にしても、多くの場合、隣接する 2・3 の文からなる発話を対象とし、そのつながりや一貫性を考察してきた。いずれも分析対象が極めて限定されており、言語活動の全体像からほど遠いものである。その結果、( 1 e ) の言語と思考・文化や ( 2 c,d ) の話し手の主張や価値観は考慮の対象外となり、ほとんど言及されることはない。

言語と思考・文化の関係については、サピア・ウオーフの仮説のように、人類学の支援のもとで時に論じられた。Whorf は一連の論文の中でアメリカインディアンの言語、特にホピ語と標準ヨーロッパ諸語 ( SAE )、特に英語の比較分析に基づいて言語論を展開した。ここでの特徴は語彙や統語法・言語類型などの言語構造を軸に言語と思考・文化の関係を考察していることである。伝統的な修辞学や文体論も個人の文章を対象にするにせよ諸言語を対象にするにせよ、言語構造を軸に考察している。確かに言語構造は客観的に記述・分析することができる。そのため言語構造が思考・文化や話し手の主張・価値観を直接反映するのであれば、この分析法も妥当である。しかし現実異なる。思考・文化あるいは主張・価値観はすべて意味の問題であり、言語構造の問題ではない。意味は意味固有の「論理」をもっており、言語構造はそれを表現する 1 つの支えにすぎない。

従来の意味分析には分析対象の狭さ、言語構造中心主義という 2 つの大きな限界がある。その限界を克服し、( 1 e ) ( 2 c,d ) にいかに接近するかという課題がある。そのためには言語に関与する多様な領域にまで対象を拡大し、言語だけでなく人間の認知・思考・行動・社会の慣行などに含まれるあらゆる意味を分析する必要がある。まず言説とも呼ばれる個別の言語表現全体に意図されている主張や価値観を明らかにしていく。そこには多様な意味が関与しているはずである。そのような意味が明らかになった段階で言語と認知・文化・社会などとの関係もより具体的に論じることができよう。

## 2 言説に埋め込まれている主張や価値観

次は第2次大戦終了直後の1946年に公表されたものである。引用が長いが、3人の主張を理解するためにはやむをえない。

(3) In our time, political speech and writing are largely the defence of the indefensible. Things like the continuance of British rule in India, the Russian purges and deportations, the dropping of the atom bombs on Japan can indeed be defended, but only by arguments which are too brutal for most people to face, and which do not square with the professed aims of political parties. Orwell (1946, 'Politics and the English language')

(今日、政治で話されたり書かれているものの多くは弁護できないものを弁護している。英国のインド支配の継続、ソ連の粛清と追放、日本への原爆投下などはほとんどの人にとってあまりにも乱暴で反論に値せず、政党の公的な方針と相容れない論拠によってしか弁護できないものである。)

(4) 日本の国語ほど、不完全で不便なものはないと思ふ。...私は60年前、森有礼が英語を国語に採用しようとしたことを此戦争中 degree 々想起した。若しそれが実現してみたら...日本の文化が今より遥かに進んでゐたであろう事は想像できる。...そこで私は此際、日本は思い切って世界中で一番いい言語、美しい言語をとって、そのまま、国語に採用してはどうかと考へてゐる。それはフランス語がもっともいいのではないかと思ふ。志賀直哉(1946, 「国語問題」)

(5) だまされたということは、不正者による被害を意味するが、しかしだまされたものは正しいとは、古來いかなる辞書にも決して書いてはないのである。だまされたとさえ言えば、いっさいの責任から解放され無条件で正義派になれるように勘ちがいしている人は、もう一度よく顔を洗い直さなければならぬ。しかも、だまされたもの必ずしも正しくないことを指摘するだけにとどまらず、私はさらに進んで、「だまされるということ自体がすでに一つの悪である」ことを主張したいのである。...そしてだまされたものの罪は、ただ単にだまされたという事実そのものの中にあるのではなく、あんなにも雑作なくだまされるほど批判力を失い、思考力を失い、信念を失い、家畜的な盲従に自己の一切をゆだねるようになってしまっていた国民全体の文化的無気力、無自覚、無反省、無責任などが悪の本体なのである。伊丹万作(1946, 「戦争責任者の問題」)

(3)のエッセイでOrwellは政治が弁護しようのないものまでも弁護しようとしてあいまいな表現を多用することを批判している。ことばが時の権力者の「番人」になり下がり、言語の創造性が抹殺されることを憂いている。この言語の墮落は現代文明の墮落でもあり、人間の未来社会へ強い危機意識をもっていた。Orwellの危機意識はその後1949年に発表した未来小説「1984年」につながっている。

(4)の志賀直哉はあまりにも単純な言語観をもっており、ことばを用いることを生業とするOrwellと同じ作家であるのかと疑いたくなる。森有礼(1872)の簡易英語の導入案は当時多くの批判を受け、すぐに廃案となった。志賀にとってはフランス語が世界中で一番美しい言語のようであるが、その理由は示されていない。(4)のあとでは自分は頑固に尺貫法を使っており、自分が身

につけた国語の枠外に出られないが、子供たちはメートル法により教育が楽になっており、子供や孫のために国語問題を徹底的に解決してもらいたいとも言っている。世界で10進法への移行が同意されて久しいが、いまだに英米ではヤードやポンド法が主流である。志賀がまだ生きていたらこの実態をどう考えるのであろうか。このような言語観は単純素朴なもので実態を知ることによって修正が可能かもしれない。しかしOrwellと志賀には決定的な違いもある。Orwellが言語のあいまいさや墮落は戦争や政治によってもたらされ、これは時代相として文明の墮落をも示唆していると主張するのに対して、志賀は日本が戦争に負けたのは日本の国語が不完全で不便なせいであるとしている。志賀の主張にはことばを用い、文化を創り、戦争を起こしている人間が不在である。ことばや戦争がまるで自然現象であるかの観を呈している。いかにも能天気である。言説の背後にある価値観がOrwellと基本的に異なる。こうした価値観は簡単に変容しそうにない。

(4)の志賀は敗戦のショックからあらぬことを口走ったものとも思えない。(5)は同じ1946年に発表された伊丹万作の主張である。伊丹は映画監督であり、「無法松の一生」や「手をつなぐ子等」のシナリオを書いた。エッセイの名手でもある。(5)を公表した年に46歳で病死したが、生前発表されなかったものも含めて死後に全集も出ている。(5)の伊丹によると、戦争はだます者とだまされる者があってはじめて起こり、両者の間で戦争責任に軽重の差があることを認めながらも、被害者であることによって加害者であることを忘れ、責任を免罪しようとする傾向を厳しく批判している。伊丹は戦争末期に当時未発表の「戦争中止ヲ望ム」という文章も書いている。戦争を引き起こした人間の責任を問い、戦争の世紀ともいわれる20世紀の時代相を糾弾する点で、伊丹は志賀よりむしろOrwellに近い。

(3)-(5)は基本的に個人の主張であり、個人の価値観の表明である。しかし言説には意味上個人のものだけでなく、時代や社会に特有の主張や価値観も埋め込まれているはずである。それは言説にどのように反映するのであろうか。

### 3 言説の秩序

M.Foucault (1970) は「言説の秩序」(L'ordre du discours) という題でコレ - ジュ・ド・フランスの教授就任講演を行なった。そこでは「言説は法則の秩序のうちにある。...あらゆる社会において、言説の生産はいくつかの手続きによって同時に統御され、選択され、組織化され、再配分される」(中村訳：8 - 9) とし、言説は3つの排除のシステムが働いているという。つまり、必ずしもすべてについて語る事が許されないという禁止、狂気に対する分割と拒否、富・豊潤・合理性などの普遍性を求める真理への意志である(同上：20)。この排除のシステムは時代による社会的・政治的な差別や支配と結合している。例えば狂気の排除も正気と狂気を区別するようになった近代になって生まれたものである。排除のシステムを含む言説の秩序は権力と知の協働による産物といえる(詳しくは児玉2003a参照)。

Saussure (1916) はかつてラングが「社会的約束事」であるといった。Foucaultの「言説の秩序」も言語記号上の「約束事」であるが、ラングと違って語彙項目や言語形式に直接反映されない。意味上、社会の権力体制から押しつけられた規律であり、特定の時代や社会の構成員は無意識的にその価値観を共有している。ただ注意すべきは「秩序」といい「約束事」といい、これは1つの傾向

であり、特定の時代や社会の「言説の秩序」を例外的に破る言説も存在する。異端の言説がやがては秩序を形成する言説になることもある。

次はFoucaultにも言及したSaidの発言である。

(6) a. Orientalism [can be discussed and analyzed] as a Western style of dominating, restructuring and haing an authority over the Orient. I have found it useful here to employ Michel Foucault's notion of discourse, as described by him in *The Archaeology of Knowledge and Discipline and Punish*, to identify Orientalism.

Said (1978, *Orientalism* :3)

(オリエンタリズムとは、オリエントを支配し、再構成し、威圧するための西洋の様式であると論じ、分析することができる。オリエンタリズムの正体を明らかにするために、『知の考古学』や『監視と処罰』でM.Foucaultが記述しているような言説の概念を利用することがここでは有益であると思う。)

b. 「テロリスト」という言葉が、イスラエルによって1970年代なかばからパレスチナ側のいっさいの抵抗活動を表現する言葉としてシステムティックに用いられはじめた。

Said (2002, 中野訳『イスラエル、イラク、アメリカ』: 69)

c. [これまでの議論で]とても心配なのは、分析や反省が不在なことです。たとえば「テロリスト」という言葉をとってみましょう。この語は、いまや、反米主義と同一視されています。そして今度は、反米主義と合衆国に批判的であるということが同義であるとされ、ひいては合衆国に批判的であるということは愛国心に欠けるということに等しいとされるのです。こんなむちゃな等式の連続は、とても受け入れられません。テロリズムの定義はもっと正確でなければなりません。そうしなければ、たとえばイスラエルの軍事占領と戦うためにパレスチナ人がしていることと、世界貿易センターをつぶしたようなテロとを区別することができなくなってしまいます。

Said (2001, 中野・早尾訳『戦争とプロパガンダ』: 94)

(6 a) はFoucaultの「言説(の秩序)」の概念を『オリエンタリズム』の理論的な支えとし、ヨーロッパ人にとってオリエンタリズムが何であるのかを明らかにしている。オリエントがヨーロッパ人により客観的・普遍的な装いをもって描かれるが、それは実体と異なり、ヨーロッパ人の頭の中で作り出されたものであり、そこには他者である東洋[特に中東]に対して自らを優越者とみるヨーロッパ文化固有の価値観や偏見が隠されているとも言っている。Saidは(6 a) 後も2003年9月25日に白血病で亡くなるまで精力的に中東問題について発信した。(6 b,c) は9.11事件後のアメリカを論じた本からの引用である。利害を共有するイスラエルとアメリカが結託し、抵抗と純粹のテロ行為の区別を取り払い、自分たちの侵略行為を隠蔽するためにアラブ人の正当な行為をもテロと呼んでいるという。Saidによれば、古くからヨーロッパ人がいっていた「オリエンタリズム」という言説の秩序が今やアメリカ人にも共有されていることになる。

「言説(の秩序)」が存在するという認識は20世紀なかば頃より特にヨーロッパで強い。その概念は支配・権力・ヘゲモニー・不平等・イデオロギーなどをkey wordsとするde Dijk, N.Faircloughなどの批判的談話分析にも引き継がれている(詳しくは児玉2003a参照)。次例はある化粧品会社の宣伝文である。権力体制と直結するものではないが、時代や社会によって変わる価値観と密接に関連している。

## ( 7 ) Part of the art of being a woman

is knowing when not to be too much of a lady.

( 女であることの術の 1 つはレディでありすぎない時を知ることである )

( 7 ) は Brøgger ( 1992:74 ) による。広告文の上部には半分透けたドレスを着てにっこり微笑んでいる美人モデルが写っている。Woman と lady の含意の違いを巧みに利用している。一般に woman は自然に成長した一人の女性を, lady は育ちのよさ・教養・規律を含意する。the art of being a woman では woman であることは本来生得的なものであるが, 実は自らを魅力的にする「術」であるといい, 後半部分ではときに lady のようにあまり「お上品」にならないようにとも忠告している。ここには女性はその性だけで女性とみられるのではなく, 他人がそうだと認める性のイメージに自らを作り上げていく必要があり, 女性にとってはそうした術や容姿を身につけることが大事であるという価値観が隠されている(詳しくは児玉 1998:177 参照)。性差別を再生産しているか否かはともかく, このような広告文は現代の欧米や日本などで通用する「言説の秩序」である。しかし世界の多くの地域では通用しないし, 欧米や日本でも 100 年前には通用しなかったであろう。

言説の秩序が時代や社会により異なるとすれば, ( 6 ) でみた欧米の言説の秩序に比べて日本社会での言説の秩序はどのようなものであろうか。若干の例を検討してみよう。

次例は英語などと比較し, 日本語の特徴を日本人の心や日本文化にまで敷衍している(詳しくは児玉 2003b 参照)。

- ( 8 ) お手伝いさんが台所でコップを手からすべり落として, コップが割れてしまったとする。日本人はこのような時「私はコップを割りました」という。聞けばアメリカ人やヨーロッパ人は「コップ(グラス)が割れたよ」と言うそうだ。もし「私がグラスを割った」と言うならばそれは, グラスを壁に叩きつけたか, トンカチか何かで叩いたような場合だそうだ。「私がコップを割りました」というような言い方をするのは, 日本人にはごく普通の言い方であるが, 欧米人には思いもよらない言葉遣いかもしれない。これは日本人の責任感の強さを感じさせる。自分が不注意だったからコップが割れたので, 割れた原因は自分にある。そういう意味では自分が壁に叩きつけたりしたのと同じである。そう思って「私が割りました」と言うのだ。そう思うと, この簡潔な言い方の中に日本人の素晴らしい道義感が感じられるではないか。誰が言い出したか, 教えたか分からないが, 日本人にそういった気持を根付かせてくれた先祖たちに謹んで頭を下げたい。
- 金田一春彦(2000「日本語のこころ」)

- ( 9 ) a. われわれは話をするとき, 主語とか目的語を省略するのではなくて, 意識をせずにしゃべっていることが多いのではないのでしょうか。...「かあさんがすきなよ」といったら「かあさん」が主語みたいに感じませんか。あのときに「私は...」とかなんとかひとつも言わないのですね。「かあさんを」とも言わないでしょう。英語的表現をすると「私は母を愛します」という。ところが, 「かあさんがすきだ」と言っているときは, 言っている子どもはもうそのなかに入って, 消えているぐらいの感じなのです。そういう言い方のできるのが日本語だと思います。河合隼雄(1996「日本語と日本人の心」)
- b. 真如という観点からすると, 私がいって, あなたがいるというのは妄念なのです。全部真如のあらわれとしてみんなが動いているのですから, という考え方なのです。だから非常に大事にしている「私」というものさえ, もう私もあなたもないというぐらいのすご

い区別のない世界というもの、これが世界だということがわかって、いまここに生きている。そのあらわれとして私が生きているというふうな生き方をしましょうというのが仏教の考え方です。…いちばんの底のところのいちばん大事なところは離言だという前提があるのです。だからそのことをうっかり言ったらもう依言真如になりますからね。だからいちばんいいのは、ただ黙っていることになってくるのです。(同上)

まず(8)からみてみよう。コップが割れたことを記述する場合いくつかの文脈がある。日本語で「私はコップを割りました」というのはお手伝いさんが主人に謝るときに限られる。お手伝いさんがうっかりコップを落としたり手がコップに触れてコップが割れた瞬間は通例「あ、(コップが)割れた」という。英語では主人に謝るときでもうっかりコップが割れた瞬間でも「私はコップを割りました」の直訳に相当するI broke the glass. といい、日本語式の「あ、割れた」のOh, the glass broke.は不自然である。この日英語の違いは、出来事を記述する際、英語が行為を起こした人に焦点をあてるのに対して、日本語が人を背後に追いやり出来事の状態に焦点をあてる特質に由来する。(8)の金田一は日英語の特質を逆に解釈しており、事実誤認もはなはだしい。より重大な誤りは自分の責任を明示する言語をもつ人は道義感があり、責任感が強いと主張している点である。この主張をそのまま日英の言語実態に適用すると、状態に焦点をあて人の行為をぼかす日本人が無責任で、人に焦点をあてる英米人は責任感が強いことになる。この誤りは言語表現を責任感や文化と直結させることにある。言語表現の型は必ずしも心理や行動の型を直接写すものではない。豊富な敬語を駆使する日本人が敬語をもたない英米人より年長者を尊敬し、大事に遇することに直結しないことと同様である。(8)の言説は二重三重の誤りを犯しているが、残念なことにこの「日本語のこころ」は日本エッセイスト・クラブが編集した2000年度ベスト・エッセイ集全体の表題ともなっている。その本の帯には「日本人特有の心づかいを解き明かす表題作をはじめエッセイの楽しみ満載の珠玉の61編」とある。エッセイスト・クラブは「日本語のこころ」がお好きなようである。しかしまちがった「日本語のこころ」を教えられ宣伝されても、迷惑するのは読者である。

河合は(9a)の初めで「『かあさん』が主語みたいに感じ」といい、(9a)の末尾で「子どもはもうそのなかに入って、消えているぐらいの感じなのです」と述べている。ここでは本来の主語である「私」が消え、「が」格をとる「かあさん」のなかに入って、「私」と「かあさん」が融合しているといいたいのであろう。しかしこの言語分析はまちがっている。子どもは日本語の習得過程で「かあさんが」の「が」が主語だけでなく目的語にもつくことを知っている。つまり、述語が「好きだ、嫌いだ、得意だ、できる」などの状態を表す場合、<対象>の目的語のあとに「を」とともに、あるいはそれより自然な形で「が」がつくことを直感的に知っている。これは生得的な言語能力に由来する。そのことはいちいち大人に教えてもらわなくても自然に習得することから証明される。子どもは自分がかあさんと異なる存在であることも十分知っている。「算数がすきよ[きらいよ]」といったからといって自分と算数が決して融合しているわけではない。既知情報の主語や目的語を省略するのは日本語だけの特質ではないし、述語によって目的語が主語と同じ「が」をとるのは日本語が部分的に能格言語の特徴を有するためであり、(9a)で言及されている言語特質はすべて日本語固有のものではない。

河合の日本語分析には独断的なところがある。しかしより大きな問題はその独断的分析を基礎に我田引水して仏教論や日本文化論を展開するところにある。(9a)のあとで河合は「子ども」も

「母」もことばでこそ区別されるが、ことばを離れた世界ではそれぞれが融合しており、ここに仏教の影響を受けた離言真如的な考えがみられると述べ、(9b)に続いていく。(9b)は仏教の世界に入りますますあいまいになっていく。「私」「あなた」と区別することが妄念であり、区別のない世界こそが真如であるという。もっとも、逆説ながら、区別を全部妄念だといったん否定しながら区別のない世界からの「あらわれとして私が生き」ており、妄念そのものも真如だと考えている。ことばに依る区別は依言真如であるが、ことばを離れた離言真如こそいちばん深いところにある。そこで(9b)の末尾が主張するように、真如に最も近い世界は、禅が教えるように、ことばを超えたところにある。

河合の「あいまいさ」への信仰は筋金入りである。次例は中沢新一との共編『「あいまい」の知』(2003)の序を構成する論考の一節である。

(10) a. 現実というのは非常に多義的ではないか。非常に多義的ではあるがそれを一義的に把握した近代科学の世界観があまりに強くなりすぎているのではないかと考える。

河合(2003「曖昧さと『私』」)

b. ミッドウェイの海戦を分析すると確かに大將は判断は間違っている。しかし、これは近代科学的方法で分析するから大將が間違っているのもっとも日本的な考えによるとそのときのお月さんの出かたとか、波の揺れ方、それから星の輝きとか全部責任をもっているわけですから、そのときその大將だけを追及することは絶対に間違っているわけなんです。さらにいえば、ミッドウェイの海戦でアメリカは勝って日本は負けた、だから日本はだめだなんていうのだけれど、人生は無常だということを知っている人にとっては、勝っても負けてもそんなに大して違わないんですよ。もっとも大事なことは死んだ方々がどこへお行きになったかで、その海戦で死んだ方々の魂が今どこにいるかということの方がそうした見方からすると非常に大事な問題です。(同上)

(10a,b)の河合によると、戦争や経済での失敗の責任を特定の人に負わせるのはまちがいである。近代科学の世界観は因果関係や責任を明確にし、一義的に把握しようとしているが、現実のもっとも多義的であり、勝ち負けの責任はあいまいである。自然現象までもしばしば関与している。「人生が無常だということを知っている人にとっては、勝っても負けてもそんなに大して違わない」ことになる。ここでは主張や価値観の対立も存在しなくなり、ことばからの退却が暗示される。

Foucault(1970)はその講演の冒頭で自分もしょせん諸制度から押しつけられた危険な言説の秩序の中にあり、漂流物のごとく言説によって運ばれるままに身をゆだねるのを拒否し、話をしたくない欲求が心のすみにあると打ち明けたうえで、言説秩序の危険がどこにあるかという話題から話をはじめている。しかしFoucaultの言説から退却したいという欲求は既存の言説の枠や相克する主張や価値観を意識したものであり、河合のように「無我の境地」に入ることばから退却することとは基本的に異なる。『「あいまい」の知』の帯は「21世紀の世界を解く鍵は『曖昧』にある」と宣伝するが、この「あいまいさ」から一体何が生まれるのであろうか。

(4)や(8)-(11)からうかがえるように、「あいまいさ」が日本社会の「言説の秩序」の基礎をなしている。政治においても日本は主張があいまいで「顔」が見えないとしばしば言われる。小泉首相は2003年6月の党首討論でイラク戦争の大義とされる大量破壊兵器がまだ見つからないのではないかの批判に答えてその存在の可能性を主張するため「フセイン大統領が見つからないからイラクにフセイン大統領が存在しなかったといえないでしょう」と反論し、失笑を買った。論点のす

り替えであり、はぐらかしである。大量破壊兵器の有無が政府の存亡にかかわるほど真剣な議論が行われている諸外国の議会と対照的である。最近(2004年4月)、福岡地裁で小泉首相の靖国参拝を違憲とした判決が出て、参拝問題がまた話題になっている。近隣諸国から侵略の歴史をどう考えるのか、A級戦犯が合祀されている靖国になぜ参拝するのかの問いに対して、首相は国に尽くした戦没者が眠る靖国に参拝してなぜ悪いかと答えるだけで、問いと答えが全くかみ合っていない。また首相は参拝が公的か私的かと聞かれて口をにごした。意識的にあいまいに答えているようにもみえるが、結果的には(10b)で河合のいう「日本的な考え」に合致している。このようなあいまいな主張はあいまいな因果関係を受容し、責任の不明確さとも連動しており、(4)の志賀、(8)の金田一、(9)(10)の文化庁長官の河合に共通している。Saidは(6)のような言説の秩序が欧米にあると指摘したが、同じように日本の言説の秩序としては志賀 金田一 河合 小泉に「あいまいさ」の系譜がみられる。その点、(5)の伊丹は例外的なものであり、日本の言説の秩序を破ろうとしている。その主張は50年以上前になされたものであるが、不思議に記述の正確さや責任のあり方に厳しい現代の時代精神に合致している。

#### 4 対象拡大により見えてくるもの

本節は意味分析の対象を拡大することにより何が明らかになるかを考察し、次節は言語分析、さらには言語論・文化論を含む人文社会科学に対して提言を行う。§1の末尾においては意味分析に分析対象の狭さと言語構造中心主義という2つの限界があると指摘した。§2、§3はその限界を克服する手立てとして分析対象を拡大し、言説にあらわれた言語と社会や人間の生得的能力との関係を見てきた。ここでは対象拡大により見えてくるものとして大きく4点を指摘する。

第1は言語知識と言語運用の関係である。(2)で述べたように、両者は一応区別されるが、互いに対立するものではない。両者の間は連続体をなしている。言語知識(2a)としての意味は(2b-d)の文脈情報により増幅したり限定されるだけではない。実施の言語活動では(1a-e)の多様な領域の意味のマッピングを迫られる。(1)と(2)の情報が相互に乗り入れることによって発話の解釈や適否は決定される。

- (11) a. ??The Pope is a bachelor.  
 b. \*The sun rises in the west and sets in the east.
- (12) a. \*The table was laughing.  
 b. Queen Victoria was made of iron.
- (13) a. John enjoyed [began] the book.  
 b. ?John enjoyed [began] the dictionary.  
 c. ??John enjoyed [began] the rock.
- (14) a. 'What time is it?' 'You've dropped your wallet.'  
 b. 'What time is it?' \*'By the way you've dropped your wallet.'

(11a)のbachelorは単に「未婚男性」ではない。結婚適齢期で結婚の意志をもつ未婚の男性である。その点(11a)の不適合性の判断にはbachelorだけでなく、今のPopeについての知識も必要とされ、(11b)と同様に(1d)の「世界についての知識」が関与している。(12a,b)は同じ比喩で

あるが、言語知識としての(不)適格性の違いは(1c)において写像転用の仕方が異なるためである。しかし文脈によっては、例えば童話のなかではときに(12a)も用いられる。(13a-c)においては意味上目的語と結合して命題を表す述語が省略されているが、その述語は(1d)の言語表現と世界の知識および(2bi)の場面情報により特定化され、(13a)はreadingやwritingの日常語が補われ、適格となる。しかし(13b,c)では適切な述語が特定化されにくく、多くの場合不適格となる。(14a)では文言上問いに対して答えていないが、その答えより聞き手にとってより緊急性のある重要な(2bii)の場面情報が伝えられて適格である。しかし(14b)の答えはby the wayという句が緊急な場面に反するため不適格である。

言語知識・言語運用・多様な領域の意味情報が実際の発話に相互乗り入れしているため言語知識のみを対象とする意味分析はごく一部の意味の分析にとどまり、無力である。そうかといって、相互乗り入れしているそれぞれの意味の区別をやめることはできない。その区別を設けることにより無標の意味と例外的な有標の意味、明示の意味と暗示の意味、言語普遍の意味と言語特定的意味などの違いを明らかにすることができる。

第2の点は、意図と主張の違いや知識と価値観の違いに関連する。従来の分析対象は通例文または隣接する2・3の文を最大の単位としており、(2c,d)の話し手の意図や世界についての知識を扱うことができた。

(15) a. 中国人 vs 支那人 / 外国人 vs 第三国人

b. He's coming toward us. vs 彼がこっちへ来るよ [ぞ, ね, さ]

(16) a. John hit Mary. vs Mary hit John.

b. Mary is John's widow. vs \*John is Mary's widower.

花子は太郎の未亡人である。vs \*太郎は花子の男やもめである。

(17) a. John cut his finger. The knife slipped. The knife slipped. John cut his finger.

b. The policeman came. The robber ran away. The robber ran away. The policeman came.

(15a)の対の語には話し手が蔑視を含意するか否かの違いがある。(15b)の英語は文脈によっては同じ形で告知・警告・確認・予想などを表す。日本語では話し手の意図に応じて文尾に助詞を用いてその違いを合図する。(16a)の対の文は話し手の意図に応じて主語と目的語の語順が異なる。同じように(16b)も本来対をなしてよいはずであるが、非対称的で対をなさない。これは日本語でも同様である。ここには男性中心社会が反映されているのかもしれない。(17a)では2文の語順を変えてもほぼ同じ意味になる。しかし(17b)では意味が異なる。ここでは隣接する2文の解釈において因果関係と(出来事が生じた順に表現する)写像一貫性の原則が競合している。

話し手の意図や世界についての知識は(11)-(16)にみられるように、従来の分析法でも扱われる。しかし話し手が主張や価値観を表明するのは通例文ではなく、言説や談話全体である(ただし(7)の宣伝文やことわざのように1文でまとまったテキストを形成する場合は例外的に文においても可能である)。逆にいえば、言説(の秩序)や談話全体は単に文を積み重ねたものではなく、固有の特質として意味上まとまりや統一を付与するものとして主張や価値観を含んでいる。話し手の主張や価値観を排除することは言語活動の中心的役割に目をつぶることになり、「気の抜けたビール」のようなものである。主張や価値観を扱うことは§2や§3でみたように、分析対象を拡大し、言説を対象にしてはじめて可能である。

第3点は言語と認知と社会との関係である。子どもは種としての人間が共有する生得的能力をもって生まれる。この生得的能力には認知能力や言語能力が含まれる。生得的能力が普遍的であるとはいえ、すべての人に等しく開発されるわけではない。開発の時期・方法・場所により能力の開発が変わるものと不変のものがある。ここには言語を含め、生後の発育を取り巻く社会や文化が関連する。

(18) a. /l/ vs /r/

b. 主語 > 目的語

c. 乗法九九 vs  $a - b \div c \quad d$

(19) a. The bike is next to the building.

b. \*The building is next to the bike.

(20) a. John rolled down the slope. vs ジョンは坂道を転げ落ちた。

b. John ran to the station. vs ジョンは走って駅へ行った。

(18) の /l/ と /r/ を区別する能力はすべての幼児に生得的に付与されているが、両者を区別しない日本語のような社会で育った子どもは母語を習得する 5・6 歳までに両者を区別する能力は失われ、それ以後開発するには加齢に比例して多くの困難を伴う。(18b) は世界のほとんどの言語において主語が目的語に前置することを示す。すべての言語で先に出てくる名詞(主語)のほうが後にくる名詞(目的語)より強い焦点があたり、また出来事の「力」(energy) が通例主語から目的語に移動するという意味が関与している。この意味原理が大人になって使う言語にも働いているため(18b) の普遍性が保持される。国際的な数学の調査で日本の小・中学生はいつも最高の得点をあげるが、高校生で並の成績になる。これは数学的能力よりむしろ言語文化的な問題である。つまり日本の低学年が高得点をとるのは日本語で数詞の多様な読み方を利用した乗法九九の学習によるためであり、高学年になるにつれて順位が下がるのは数式がヨーロッパ語の構造に従ってできているためである。(18c) の数式は日本語では漢文のように返り点を必要とし、理解不足を生むが、英語なら  $a \text{ minus } b \text{ divided by } c \text{ is greater than or equal to } d$  と数式の順序にそって日常語で語られる(詳しくは児玉 2002:201)。(18c) は生得的資質が生後習得する言語によって影響をうける典型的な例である。(19a,b) は論理上等しいが、認知上 bike と building のいずれが図 (figure) として主語になりうるかで言語普遍的に違いがある(図と地の認知原則については児玉 2002:145 参照)。(20a,b) をジェスチャーで表現するとき、英語のような衛星フレーム言語話者は様態(転んだり走ること)と位置の変化(落ちたり行くこと)を同時に表すが、日本語のような動詞フレーム言語話者は様態と位置の変化を別々に表すといわれる。身振りは出来事の認知の仕方に違いがあるためか、それとも言語表現を単になぞっているだけで認知の仕方に違いはないといえるのかについては必ずしも明らかでない。

言語と認知と社会の関係は意味分析にとって重要である。この三者は相互に関連したり関連しなかったりし、1対1の対応関係をなすものではない。言語表現によっては生得的な認知や言語能力によって説明されるものと、生後に習得する文化や社会の影響によって説明されるものがある。重要なことはそれぞれの領域や条件を確定することである。それだけに言語と認知・社会との間に安易な関連づけをすることは危険であり、詳しい考察は今後の課題である。

第4点は言語表現全体を対象にする意味分析として話し手の主張や価値観を含む言説または言説の秩序という概念を確立することである。第2点でみたように、言説(の秩序)や談話は単に文を

積み重ねたものではない。主張や価値観は言説や談話全体を介してはじめて表明される。先ほど第3点では言語・認知・社会という大まかな異なる領域間の関係をみたが、より具体的にその3領域に含まれる意味に焦点をあてた場合、意味にかかわるものとして(21)に述べるような因子相互の関係が問われる。ここでは言説(の秩序)が多様な因子を統合する中心的な役割をはたしている。

(21) 生得的な能力である認知能力・言語能力 生後に習得する言語(構造) 言説(の秩序) 文化・社会

(21)の相互関連が問われるとすれば、意味は(21)の両極の因子とも関係し、生得的能力、つまり種として人間の脳に由来する広義の認知過程の産物であると同時に、社会におけるコミュニケーションを通して生きのびようとする動機や志向性をもつ社会的行為の産物でもある。(21)の因子のうち、言語(構造)の左辺や右辺の一方にのみ焦点をあてる分析は言語の全体像を捉えることができない。意味全体に通底するものは認知過程と社会的行為を支配する心的過程であり、それが最もはっきり具現されたものが言説である。なぜなら言説には話し手の主張や価値観が含まれ、言語(構造)を介して左辺の認知と右辺の社会の関係が心的表示されているためである。

言説(の秩序)を確立することにより、(21)の左辺と右辺の両方の考察が必要だとわかれば、これまでの言語分析のほとんどは左辺か右辺の一方のみの考察をもって言語全体の特徴とみなしており、不十分なものとなる。例えば(8)(9)は右辺のみに焦点をあて生得的な能力に由来する言語の普遍性はいっさい考慮していない。右辺だけからみても大きな問題がある。言語表現の断片や言語類型の一部の分析から言語と文化・社会の関係を論じ、言語相対論や言語決定論を展開しているためである。言語構造の一部と文化・社会は直結するものではない。言語によるコミュニケーションの目的が意味内容の伝達交換にあるだけに、文化・社会と関連する「言語」とは最終的に言語構造よりむしろ言説(の秩序)である。社会により異なる言説の秩序が言語構造に支えられて文化を形成する。その結果、類似の言語構造をもつ社会が異なる文化を形成したり、異なる言語構造をもつ社会が類似の文化をもつこともある。

他方、Chomsky後の生成文法や認知言語学は(21)の左辺にのみ焦点をあてている。生成文法は「理想化」を求めるあまり、生得的な能力に由来する言語知識を対象とし、言語運用に含まれる社会的文脈情報を排除してきた。認知言語学は言語知識を言語運用の区別だてを厳しくしないが、認知過程を重視し、左辺中心の分析を進めてきた。いずれも今後言説や文化・社会を介して言語構造との相互関係を考察することではじめて意味や言語の全体像に迫ることができよう。

本稿の冒頭で述べたように、20世紀の言語分析は自然科学や形式主義の影響を受け、厳密な形式化にこだわるあまり分析対象を狭く限定してきた。その結果、言語分析の究極の目的を忘れ、自己の狭い領域の研究を目的化し、言語の全体像を見ようとしていない。Chomsky(1993:15)も「専門化するの進歩することの証ではない。技術的な小手先の処理に腐心するあまり洞察ある課題から目をそらすことがしばしば起こる」と指摘している。Chomsky自身、数のうえで言語理論に劣らない社会・政治評論の著作を表しており、個人として幅広い領域へ関心をよせている。言語学者として言語の自発的・創造的な側面を重視し、思想家として人間の根元的な諸権利を擁護するChomskyには一貫して人間の自由を希求する人間観や世界観がある。しかし皮肉なことに、Chomskyは具体的な分析において自分の展開する言語理論と社会・政治評論との間には直接の関係がないという。これは彼の言語理論が統語論の自立性を強調し、意味分析を軽視している結果である。確かに統語論中心の言語構造と文化・社会を直接結びつけようとしても困難である。言語と

文化・社会をつなぐ絆が見出せないのも Chomsky の言語理論に意味分析が欠如しているためである。

意味分析に言説や言説の秩序という概念を確立することで、従来の言語分析や言語論において不可解であったいくつかの謎が解明される。これまで語用論や談話分析は文を超える発話を対象にすると称しながらも、(2)との関連で指摘したように、その対象はせいぜい隣接する2・3の文であり、そのつながりや一貫性の分析に限られていた。これは談話における話し手の主張や価値観の重要性が認識されていなかったためである。主張や価値観を含む言説(の秩序)という概念を定着させようとするれば、従来の語用論・談話分析の枠組みは改変せざるをえないであろう。なお Wittgenstein 後期の「意味とは用法である」とする主張はあいまいなため、これまで多様に解釈されてきた。例えば Lakoff (1987:11) は「意味とは用法である」を支える「家族的類似性」を心理学者 E. Rosch のプロトタイプ論と同列に認知過程と捉えているが(児玉2002:207参照)、Phillips and Jørgensen (2002:97) は発話は個別社会的文脈での活動に向けられたものであり、言語の用法とは社会的文脈に依存すると述べ、それぞれ Wittgenstein を自分の陣営に入れようとしている。両者の主張は強調点が異なり一見矛盾しているが、その中間に心的表示である言説(の秩序)を仮定することにより両者のギャップもある程度埋めることができる。

言説(の秩序)が確立することにより意味にかかわる現象の関連づけが容易になるとはいえ、人間の生得的能力と言説(の秩序)の背後にある人間の思考・行動・慣行の関係には未解決の部分が多い。普遍性と多様性、遺伝と環境、認知能力と言語能力、心身二分論と心の身体化、心と脳の関係などは領域や分析レベルによっても異なり、相互にどのように重なりまた分離しているのか、人により重視の仕方も違ってくる。例えば Chomsky や Said は人権・正義などの普遍性も主張するが、Foucault は普遍性を否定している。Descartes は心身二分論を展開したが、Wittgenstein や Lakoff はむしろそれを否定し心の身体化を主張している(詳しくは児玉2003b参照)。このような問題は今後すべて決着がつくわけでもない。謎のまま終わるものもあると考えられる。しかし意味が関与する(1)(2)の全域を対象に分析することで未解決の問題を解く鍵もいくつか見出せるであろう。

## 5 意味分析からの提言

意味が関与するのは言語研究に限らない。人間のふるまいの多くが言語によって語られるとすれば、世の中での人間のふるまいは言語を形成する意味に基づいて説明される。意味を伝達交換する「道具」である言語は規則的に循環する自然現象と多様な要因により変化する人文社会現象の両方の性格を有し、意味分析は人文社会現象を解く1つのモデルをも提供する。本節は意味分析を含む人文社会科学の分析対象や方法論について2点を提言する。

第1は多様な意味の扱いに関係する。言語は1つの表現に付与される複数の意味A・B(C)のうち、領域(1)や文脈情報を含む意味(2)によって通例特定の意味(A)を好むが、ときに対極にある他方の意味(B)に用いられることもある(意味の違いについては(12)-(15),(5)と(10)を参照)。複数の意味は領域や文脈によって変化する。変化する意味は連続体をなしているため、異なる領域(1 a-e)や異なる文脈(2 b-d)にみられる相互の関係を明らかにする必要がある。多様な意味の結合は多様な原則や規則によって支配されており、競合する複数の原則や規則が互い

に矛盾するときもある。その場合、交錯する原則・規則を調整したりそれらを律するメタ原則〔規則〕を設定する必要がある。要するに、意味分析においては次の3つの課題がある（詳しくは児玉2004参照）。

(22) a. 言語にかかわる異なる領域（1 a-e）間のマッピングをする。

b. 文脈を含む異なる意味レベル（2 a-d）の精査をする。

c. 競合する複数の原則〔規則〕を調整したり、それらを律するメタ原則〔規則〕を設定する。

言語が自然現象と人文社会現象の両面をもつというのも、人間が一方では種のHomo sapiensとして生得的能力の範囲内で行動し、他方では社会において意味を形成する多様な因子に応じて異なるふるまいをするためである。意味は言語学の意味分析においても人文社会科学においても同じものを指す。(22a)の「言語」を人文社会科学において「現象」または「出来事」に変えれば、(22a-c)がそのまま人文社会科学の課題となる。この課題を追究することにより、個別の人文社会現象が他の現象といかに共通し、いかに異なるかという特質が明らかになる。その場合、他の現象との異同は同じ領域内のものに限らない。(22a)に対応して異なる領域間の現象をマッピングすることにより個別現象の特質は人間のふるまい全体の中に正しく位置づけられることになる。

第2点は全体と部分の関係である。分析対象を狭くしたうえその一部の資料から結論を導く単純な一般論はまちがいであり、原則や規則を単純化するため少数の因子に分解する安易な還元論もまちがいである。そのことは一部の言語構造や発想から安直な日本人論や文化論を展開する(9)(10)からも証明されるし、言語運用を軽視して言語知識に焦点をあて言説を分析対象から除外してきた従来の言語分析からも証明される。

21世紀の世界を解く鍵は(10a,b)のような「あいまいさ」ではなく、(6 b,c)が指摘するように、白か黒か、敵か味方かの単純な二分論にもない。人間のふるまいがすべてあいまいなわけではなく、あいまいさは確固とした基盤を前提にし、その上に存在する問題である。何事も2つに割り切る考え方は両極の違いを浮き彫りにする利点をもつが、全体が多様な部分からなることを忘れて一部をもって全体を律することになりやすい。「あいまいさ」型と二分法による「割り切り」型は表面上対立しているが、いずれも「真実」に近づく道ではない。「真実」はむしろ両者の中間にある。「あいまいさ」型は人や事態の多様性を根拠に「真実」を彼方に追いやり、「割り切り」型は簡単に「真実」をでっちあげる。さらにやっかいなことは「あいまいさ」型も「割り切り」型も世界についての特定の価値観から生まれている。両者はその価値観が政治的なものであれ宗教的なものであれ、「信じる」ところに従ってふるまい、特定の価値観をことばや言説より優先させている。その結果、全体と部分のギャップがあまりにも大きすぎる。危険なことは価値観を守るために都合の悪い事実を隠蔽し、詭弁や強弁を弄し、ことばで弁護しようのないものまで弁護しようとする。ここには(3)でOrwellが批判した言語の墮落あるいは言語の軽視がみられる。

問題は全体と部分の調和をいかにはかるかということになる。言語表現においては普遍的な基礎部分と多様な原則・規則の交錯するグレイゾーンを区別し、先ほど(22)で述べた意味にかかわる3つの課題を追究することになる。他の人文社会科学においても同様であろう。言説の主張の背後にある価値観は本来多様な領域に及ぶものである。多様な価値観に由来する人間のふるまいにおいても普遍的な基礎部分と諸原則・諸規則の交錯するグレイゾーンが存在するはずである。

全体は部分からなる。しかし原則や規則のうえで部分の総和が全体になるわけではない。全体の原則・規則には全体固有のものがある。ここでは全体と部分からどのように接近するかが問われる。

一方ではまず人間の生得的な能力から出発し、次に演繹的に全体の上位原則から部分へ、他方では部分から全体に迫り、2つの方式を融合していく。その際、各問題領域において共通部分は何か、グレイゾーンは何に由来するかを明らかにしていく。これは脳がボトムアップ信号とトップダウン信号を分担統合していることにも対応する。心と脳の働きをどのように結びつけるかという問題とも関連する。具体的に例えば文化論において全体と部分の調和はどのようにはかられるのであろうか。意味分析の(21)に準じて次のような因子が考えられる。

(23) 生得的な能力(認知能力・言語能力・文化形成能力) 生後に経験する思考・行動(の様式・慣行) 言説・文化の秩序 世界における共同体社会

これは極めて粗削りな図式である。そのような問題点はあるが、人文社会現象の解明も言語分析と同じように意味を軸に展開するだけに、(21)に準じて認知過程と社会的行為の両者を統合する必要がある。

§4の末尾では意味分析において心身二分論と心の身体化で意見が分かると述べたが、同じことが人文社会科学でもいえる。かつてDescartesは人間はことばをあやつる心を持ち、身体的刺激から独立して創造的にふるまい、心をもたない動物や機械が身体的欲求や物理的条件に従い、本能的・機械的に動くのと区別されるとした。しかし人間も物理的・物質的な要因に強く反応している。言語に現れるすべての意味は抽象的なものも含め、物理的に目に見える知覚・運動の認知を基礎にしている。人間のふるまいにおいても物理的な「力」が大手を振り、「力」のない者が「力」に擦り寄り、人は物質的な豊かさや快楽に群がる。この心の働きは身体と同様に物理的・物質的な刺激に反応する心の身体化であり、人間と動物の区別もあやしい。心の身体化は精神と身体が同一次元の異なる2つの側面にすぎないことを示唆し、心身の二元論を否定する。意味分析だけでなく文化論を含む人文社会科学においても心の身体化を認めるか否かは心脳問題とともに最も重要な課題となろう。なぜならこの課題に答えようとするれば、現象や出来事についての記述・説明・主張およびその背後にある本能・視点・価値観・イデオロギーなどが問題になり、(21)(23)の因子のすべてに関与し、人間のふるまいを生得的な能力と社会的行為の両面から説明することになるためである。

文化論(または人文社会科学)は(23)の因子相互の関係を究明することによりはじめて現象や出来事全体の普遍性や多様性を明らかにし、言語理論と文化論あるいはその他の人文社会科学との接点を得ることができよう。

#### 引用文献

- Brøgger, F.C. 1992. *Culture, Language, Text*. Scandinavian University Press.
- Chomsky, N. 1993. *Language and Thought*. Moyer Bell.
- Foucault, M. 1970. *L'ordre du discours*. (中村雄二郎 1972 『言語表現の秩序』河出書房)
- 伊丹万作. 1945. 「戦争中止ヲ望ム」(1961 『伊丹万作全集 第1巻』181-3, 筑摩書房)
- . 1946. 「戦争責任者の問題」『映画春秋』(8月号)(1961 『伊丹万作全集 第1巻』205-14, 筑摩書房)
- 河合隼雄. 1996. 「日本語と日本人の心」(大江健三郎・河合隼雄・谷川俊太郎 『日本語と日本人の心』1-70, 岩波書店)
- . 2003. 「曖昧さと『私』」(河合隼雄・中沢新一(編) 『「あいまい」の知』1-15, 岩波書店)
- 金田一春彦. 2000. 「日本語のこころ」(日本エッセイスト・クラブ(編) 『日本語のこころ』172-3, 文藝春秋)

- 児玉徳美. 1998. 『言語理論と言語論 ことばに埋め込まれているもの』くろしお出版.  
 . 2002. 『意味論の対象と方法』くろしお出版.  
 . 2003a. 「批判的談話分析 (CDA) : 言語と社会との関係を問う」『立命館英米文学』12:1-18.  
 . 2003b. 「ことばをめぐる言説 : 日本語ブームと英語第2公用語化論の奇妙な関係」『立命館言語文化研究』15.1:105-21.  
 . 2004. 「意味分析の対象と方法」『立命館文学』582:1-22.
- Lakoff, G. 1987. *Women, Fire, and Dangerous Things*. University of Chicago Press.
- 森 有礼. 1872. 「ホイットニー宛書簡」(吉田澄夫・井口有(編)1972『明治以降国語問題論集』風間書店.
- Ogden, C.K. and L.A. Richards. 1923. *The Meaning of Meaning*. Harcourt.
- Orwell, G. 1946. 'Politics and the English language.' In *Horizon* (April). Also in *The Collected Essays, Journalism and Letters of George Orwell Vol 4* (1970). Penguin Books.  
 . 1949. *Nineteen Eighty-four*. Penguin Books.
- Phillips, L. and M.W. Jørgensen. 2002. *Discourse Analysis as Theory and Method*. Sage.
- Said, E. 1978. *Orientalism*. Penguin Books.  
 . 2001. *War and Propaganda: A Collection of Essays*. (中野真紀子・平野貴紀訳, 2002『戦争とプロパガンダ』みすず書房)  
 . 2002. *War and Propaganda 3: A Collection of Essays*. (中野真紀子訳2003『イスラエル・イラク・アメリカ 戦争とプロパガンダ 3』みすず書房)
- Saussure, F. de. 1916. *Cours de linguistique générale*. Payot.
- 志賀直哉. 1946. 「国語問題」『改造』第1巻4号。(1955『志賀直哉全集 第7巻』339-43, 岩波書店)

( 本学特任教授 )